



グローバル化の中で 生き抜いていける学会へ

Toward Survivable IEICE
in the Trend of Globalization

監事 桑原秀夫

改めて言うまでもなく、ICT 技術の進展に伴って情報が世界中を瞬時に駆け巡るようになり、また地球温暖化など地球規模で物事を考える必要性も強くなり、経済活動なども含め現実の世界は、確実に ICT 化、グローバル化が進展しています。一方、インターネットやソーシャルメディアの急速な普及に伴い、一部に新たな問題や弊害、更には国際的なテロ活動なども ICT を介して活動が行われるなど、負の側面も出てきています。原子力の研究が平和利用とともに爆弾にも使われたことを思い出すまでもなく、技術には正と負の両面があるのは常なのですが、こういった環境で、このまま社会の情報化が ICT 技術の進展とともにグローバルに進んでいってよいのか、といった疑問も湧きます。ICT 技術も、負の側面や使用法などをどう防ぐか、また、競争環境、情報戦争、更には国際紛争などにどう対処するか、といった視点でも、見直すことが必要な状況にあるかと思われまます。

ICT 技術を主な領域とする本会も、そういったグローバルな動きに目を向けた対応が求められています。既に、英文論文誌の強化や国際会員への対応などは進められてきていますが、近年は、企画室や“あり方タスクフォース”の活動の中で今後の本会のあるべき姿を議論しています。私もこれらに参加させて頂き、本会がいろいろ議論し、模索し、工夫していることを実感しています。また、私は近年、本会での活動と並行して IEEE にも関わる機会があり、その中での議論に参加させてもらいました。IEEE とは、規模や運営体制など異なる点が多々ありますが、学ぶ点も多いと感じていますし、本会の方がうまく進めていると感じる場面もあります。学ぶ点としては、一言で言えば、競争環境にある、ということです。英語という共通語で活動しているため、他の学会や出版業界との競争に常にさらされており、グローバルな視点での意思決定、行動が早いことです。本会の方がうまく進めているな、と感じるのは、運営の効率の高さでしょうか。少人数で、これだけの活動ができるのは、日本特有の意識あるいは精神性の共有のようなものがあるためかと思います。これは、一方ではこれからの本会の更なるグローバル化には、課題かもしれないのですが、こういった文化の違いに関連して、最近知って驚いたことの一つは、本会の基本活動である研究会での発表が英文でも見られるようになっており、検索エンジンで見つかる状況では、欧米の感覚では、論文として既発表の扱いとして捉えられ、研究会発表の成果を基に本論文として執筆して投稿すると、以前にほぼ同じ論文を発表済み、という位置付けにされてしまい Reject される、更には二重投稿の疑いがかけられるケースがあるということです。研究会への発表は、私自身も以前これで鍛えてもらった思い出があり、論文を書く一つの段階として若手の練習にはよい機会なのですが、これについて、IEEE の中で幾人かの人に意見を聞いたり、日本での経緯を説明したのですが、現在の欧米の状況では、研究者各個人の業績や成果が h-index など即座に評価される投稿・出版の環境であることもあり、本会の研究会という制度は理解してもらえず、下手をすると、知的所有権等に対する意識が低い、などと発展途上国のような誤解を生みかねない状況にあります。査読を経た論文という位置付けであれば問題ない、ということらしいですが、こういった例を挙げるまでもなくグローバル化においては、日本での常識が通じない状況も出てくるものと思われまます。ともかく、研究者が研究成果が得られたときにそれを投稿したくなるような魅力ある学会であることが必須であり、今後、必要に応じ他の国内学会との協力なども含め、本会もグローバル化の中で生き抜いていく努力が求められているかと思われまます。